	変化後 1	2	3	4
変化前 1	278 名	343 回	54 回	18 回
2	313 回	338 名	345 回	115 回
3	70 回	411 回	498 名	1062 回
4	43 回	193 回	1181 回	5816 名

対象症例数 = 9379 名
不変症例数 = 6930 名
変化症例数 = 2449 名

改善変化回数 = 1937 回
退行変化回数 = 2211 回

(4-1(A).txt)

図 4 - 1(A)　視覚：全体

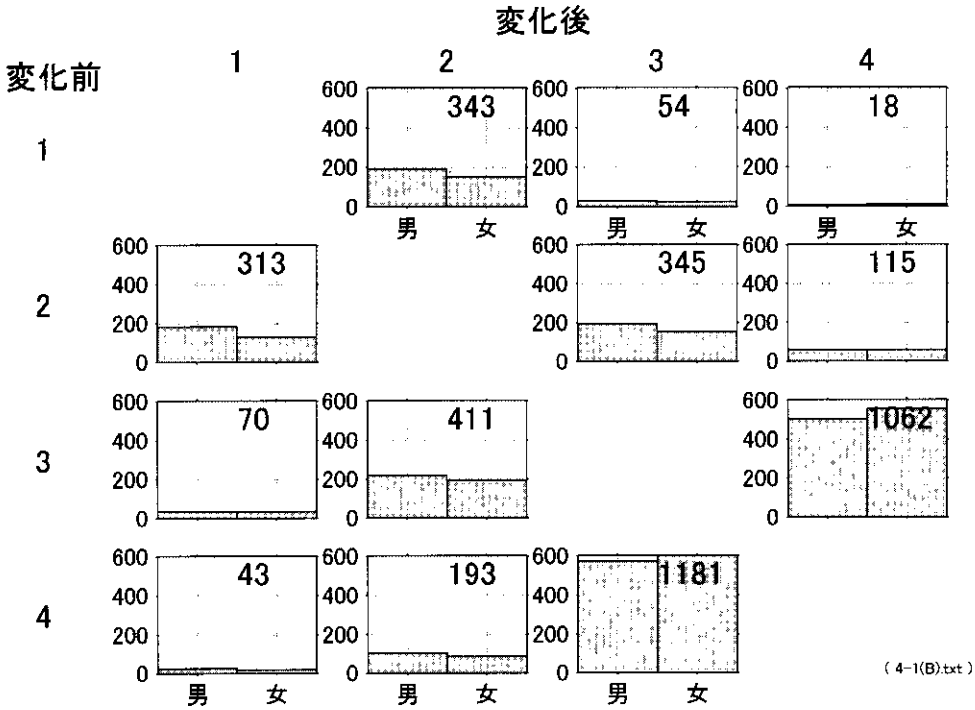

図 4 - 1(B)　視覚：性別

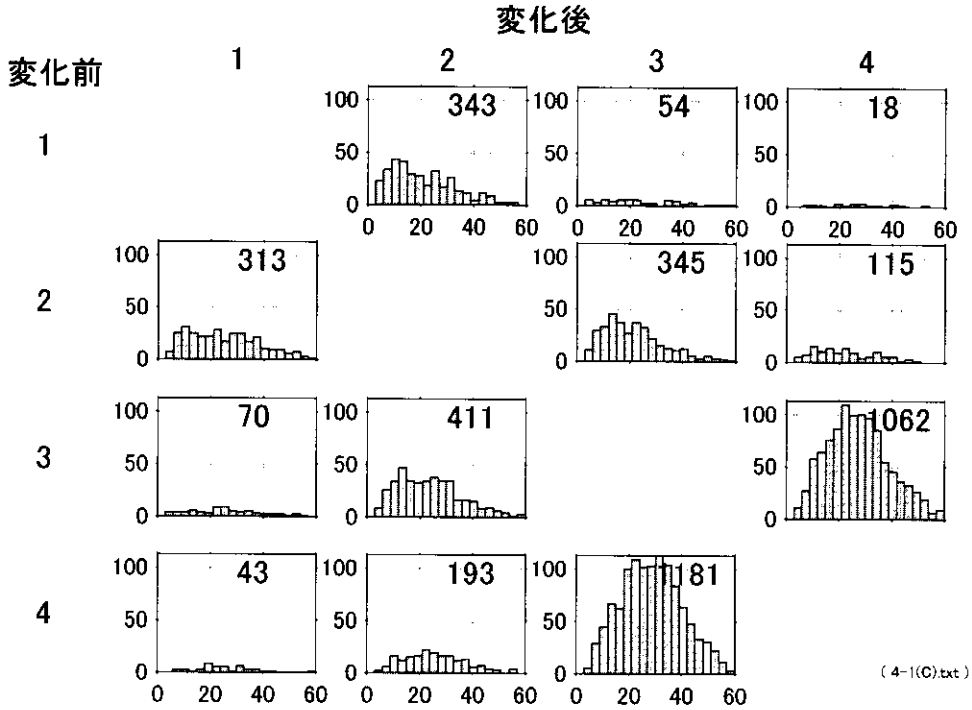

図4・1(C)　視覚：年齢（歳）

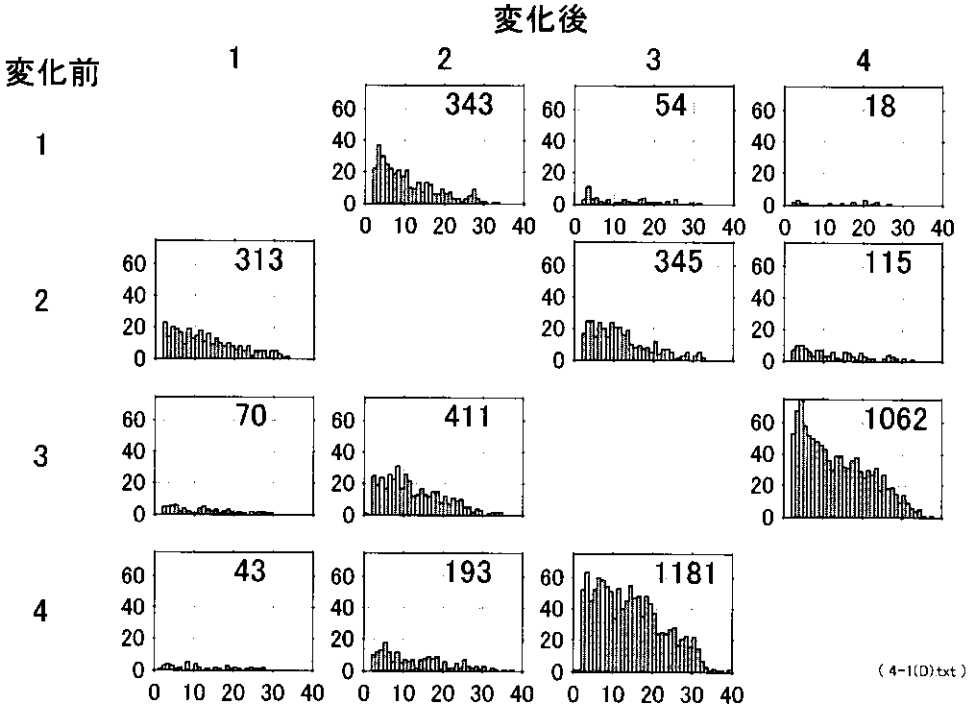

図4・1(D)　視覚：変化発生までの入所期間（年）

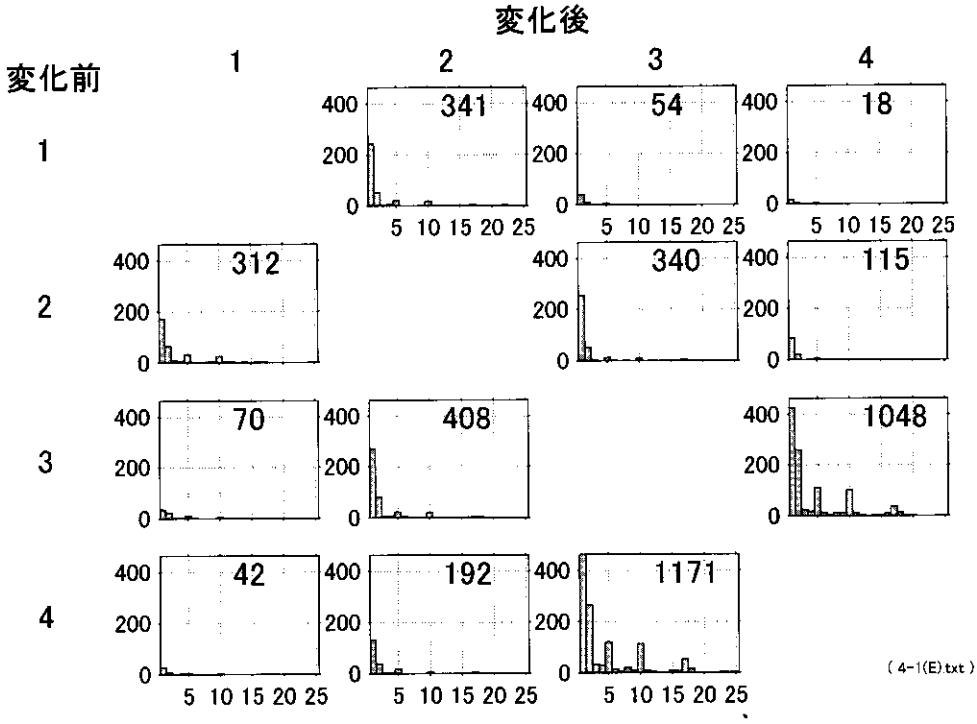

図 4 - 1(E)　視覚：大島の分類

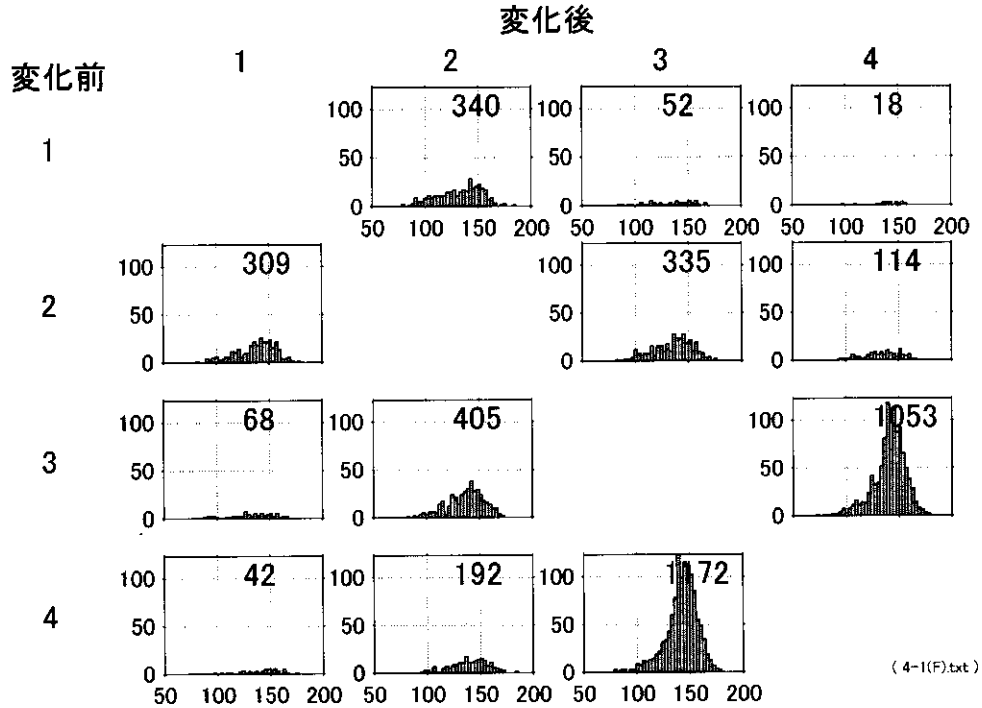

図 4 - 1(F)　視覚：身長（cm）

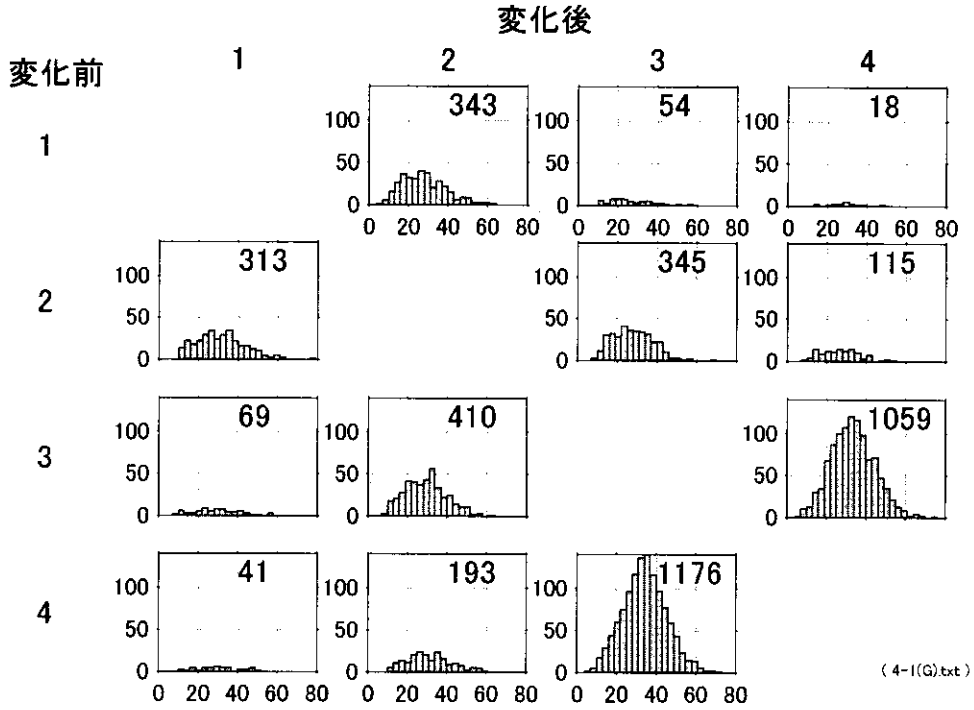

図 4 - 1(G)　視覚：体重（kg）

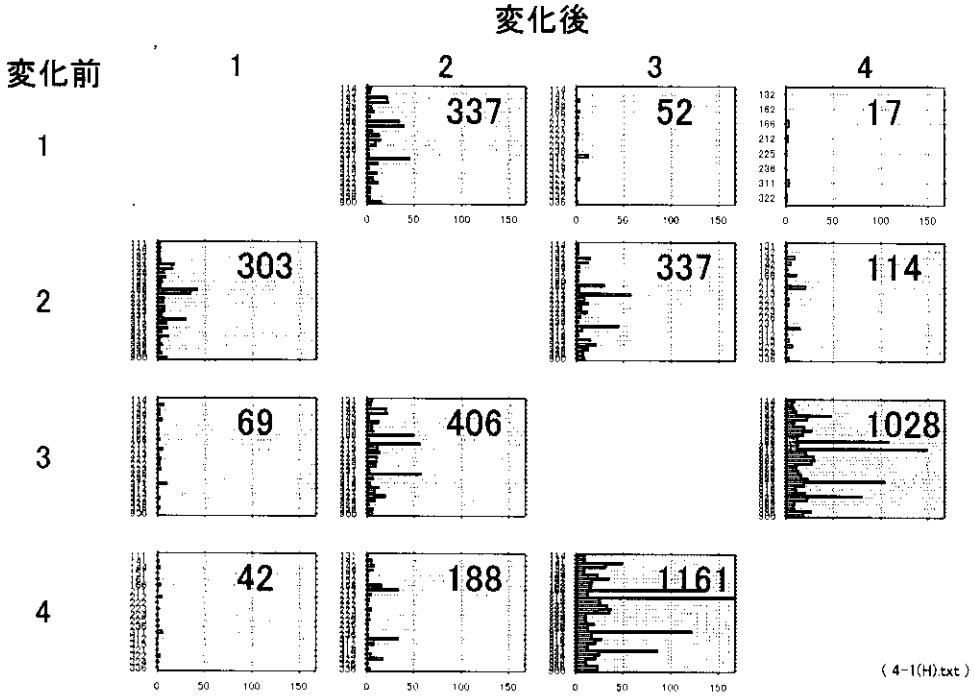

図 4 - 1(H)　視覚：主要病因

4.2. 聴　覚

■旧版・改訂版　共通■

1	全く聞こえないようだ
2	音は聞こえているようだ
3	強い音刺激には，はっきり反応がみられる
4	よく聞こえている

＜図 4-2 (A)～(H)＞

全体：対象症例数 9374 名の中で不変群 7372 名を除いた，2002 名（21.3%）に変化がみられた。改善は 1740 回，退行は 1710 回発生し，改善および退行変化は概ね同頻度であった（改善/退行：1.8%）。また，改善と退行の和（3450 回）を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.73 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，2 群→3 群（269 回，改善回数の 15.5%），2 群→4 群（762 回，43.8%），3 群→4 群（537 回，30.9%）であった。一方，退行に関しては，3 群→2 群（260 回，退行回数の 15.2%），4 群→2 群（770 回，45.0%），4 群→3 群（508 回，29.7%）の変化が多くみられた。つまり，2 群から 4 群の範囲での動きが中心となった。

年齢：改善 2 群→3 群は 6～8 歳にピークがあり，3 群→4 群は 18～23 歳にピークがあり，2 群→4 群は 30～35 歳にピークがあった。年齢が高くなるにつれて，改善の度合いがはっきりしてくる傾向があった。

視聴覚機能のまとめ：

重症児において視覚と聴覚は，年齢とともに評価が定まる形で低いレベルから次第に高いレベルにおいて改善あるいは退行することが示された。視覚については，「よく見えている」状態と「視力は弱いが見えている」状態の間で変化するものが約半数と最も多く，年齢は 20 歳代前半で件数が多かった。聴覚は，6～8 歳頃に「聞こえているようだ」から「強い刺激に，はっきり反応する」ようになり，20 歳前後では，さらに「よく聞こえている」へと改善する件数が多かった。この研究における視覚と聴覚の評価は，生活の様子から臨床的に判断されているため，重症児の発達に伴っての行動の変化や施設生活への適応に伴って変化することが考えられた。

	変化後 1	2	3	4
変化前 1	90 名	101 回	43 回	28 回
2	88 回	344 名	269 回	762 回
3	34 回	260 回	110 名	537 回
4	50 回	770 回	508 回	6828 名

対象症例数 = 9374 名
不変症例数 = 7372 名
変化症例数 = 2002 名

改善変化回数 = 1740 回
退行変化回数 = 1710 回

(4-2(A).txt)

図 4 - 2(A)　聴覚：全体

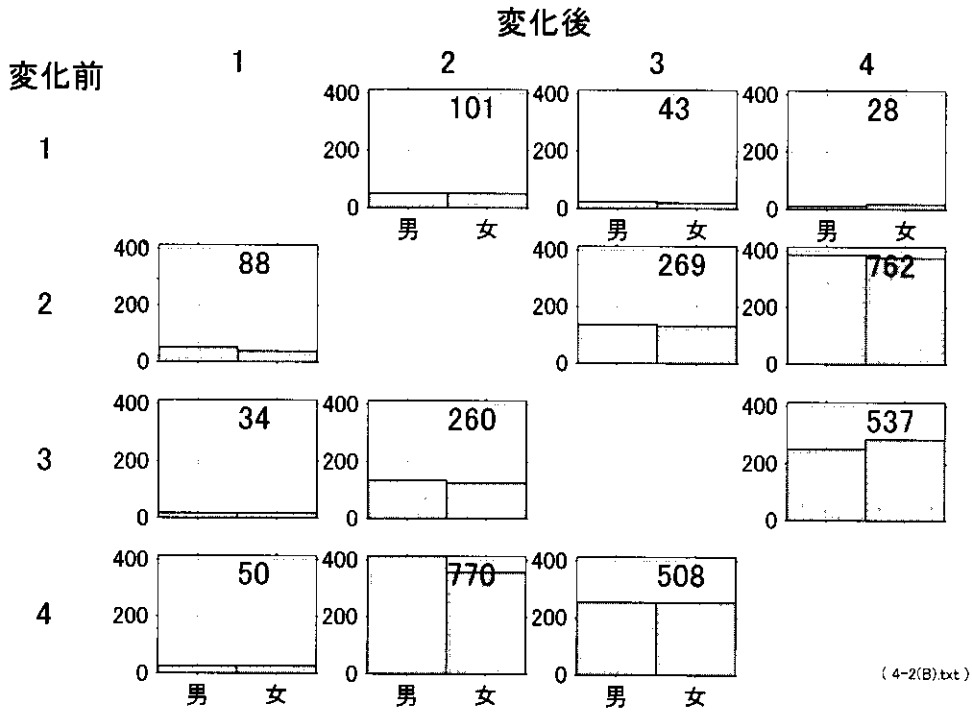

図 4 - 2(B)　聴覚：性別

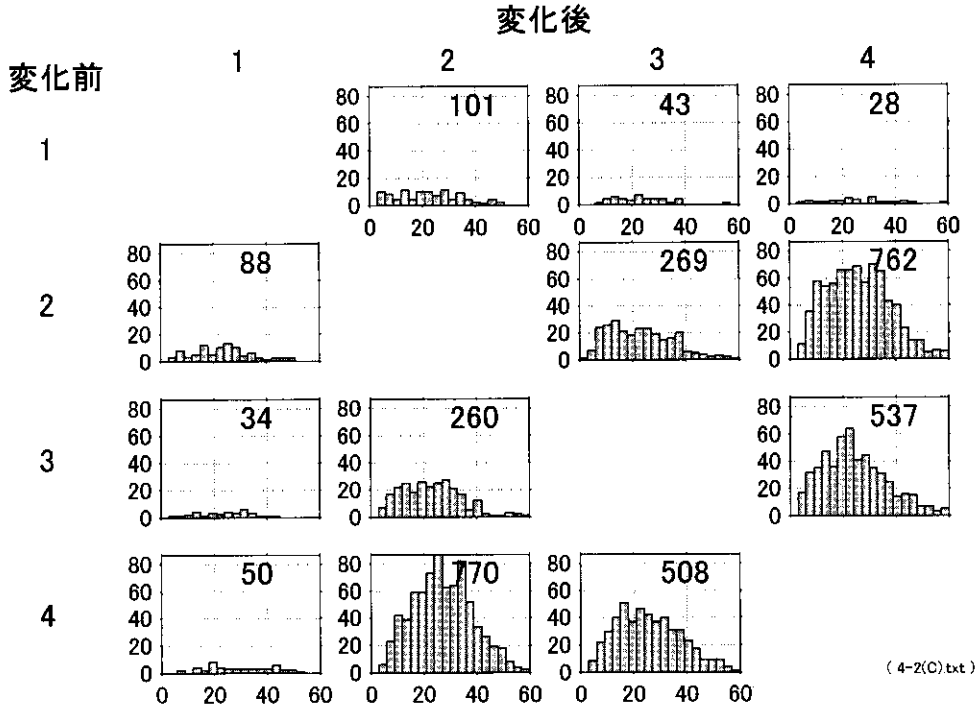

図 4・2(C)　聴覚：年齢（歳）

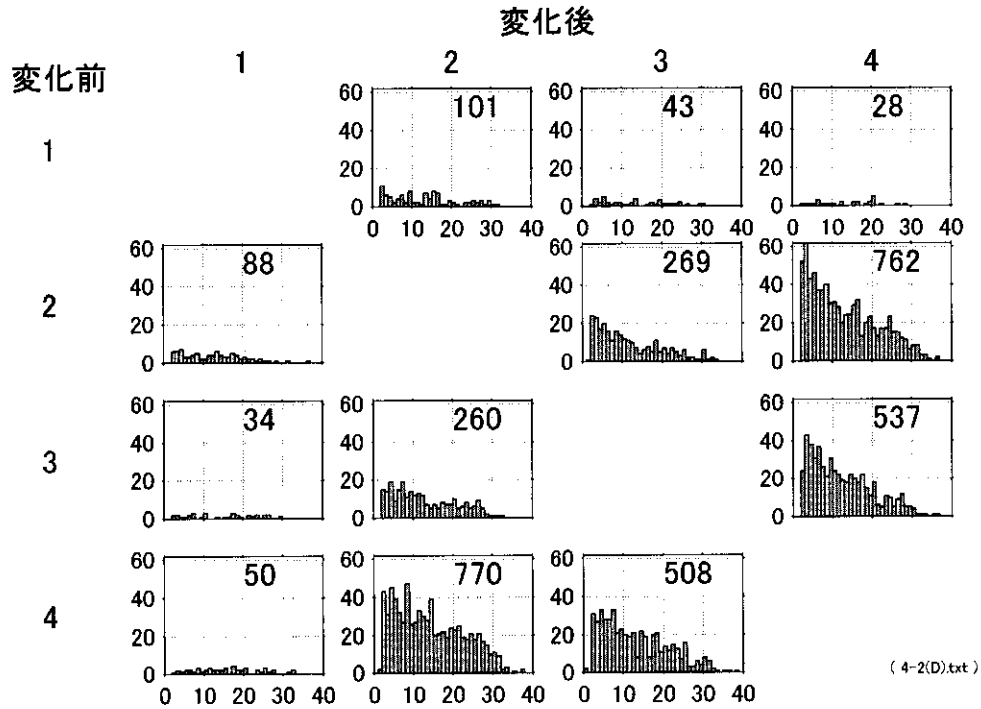

図 4・2(D)　聴覚：変化発生までの入所期間（年）

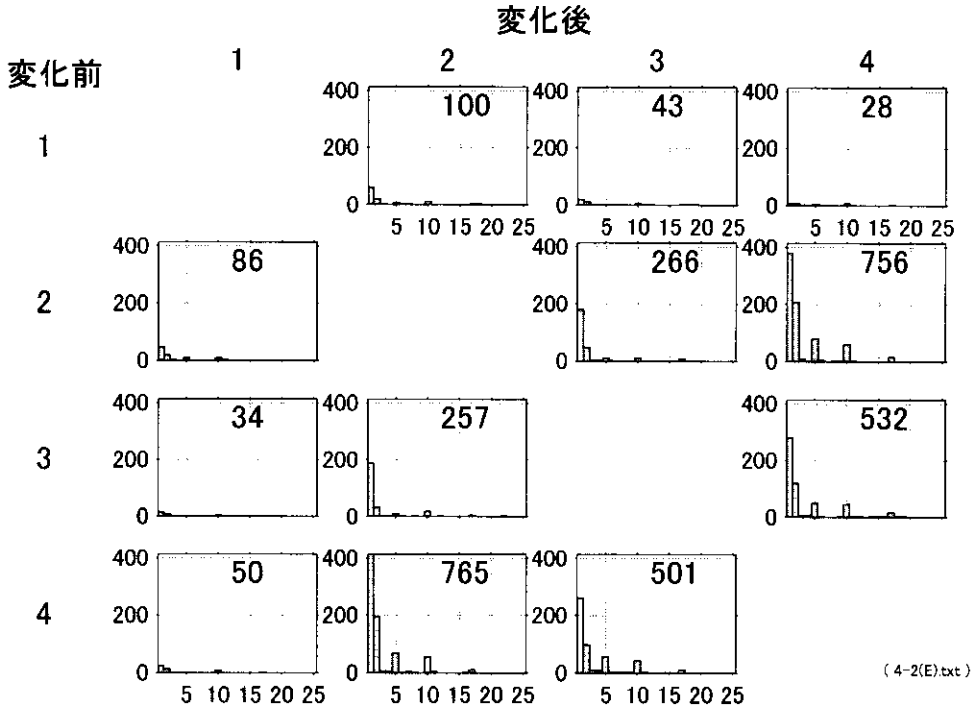

図 4・2(E)　聴覚：大島の分類

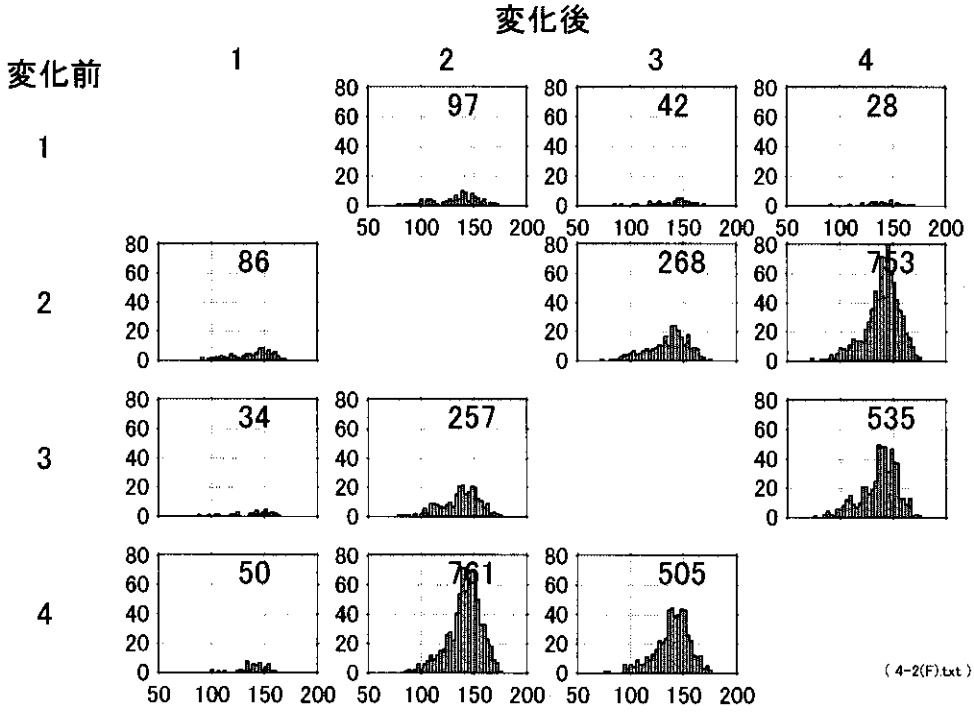

図 4・2(F)　聴覚：身長（cm）

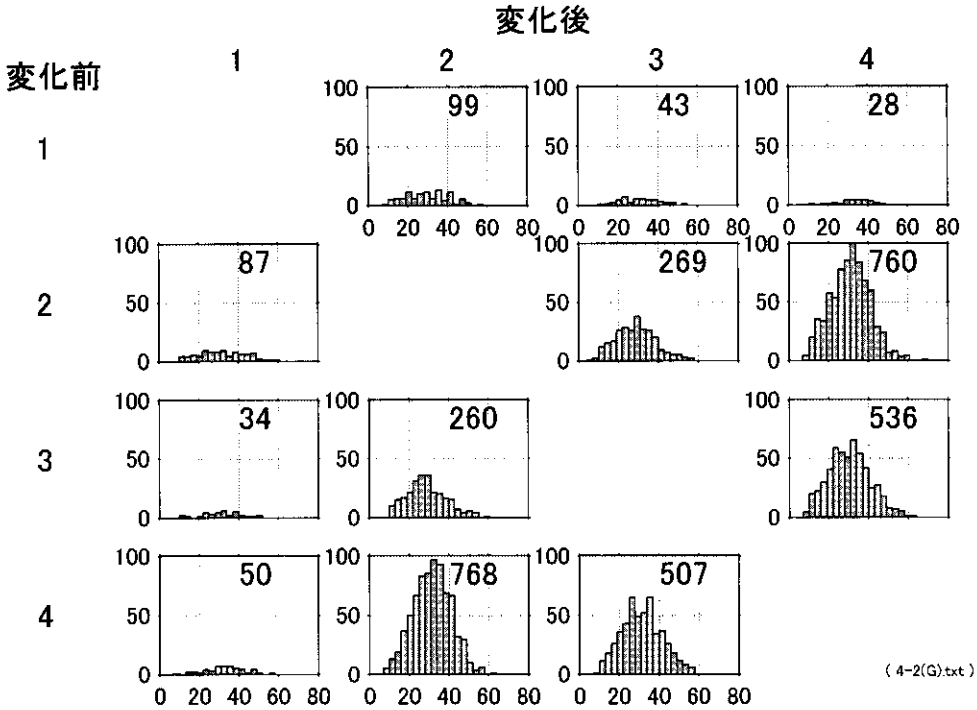

図 4 - 2(G)　聴覚：体重（kg）

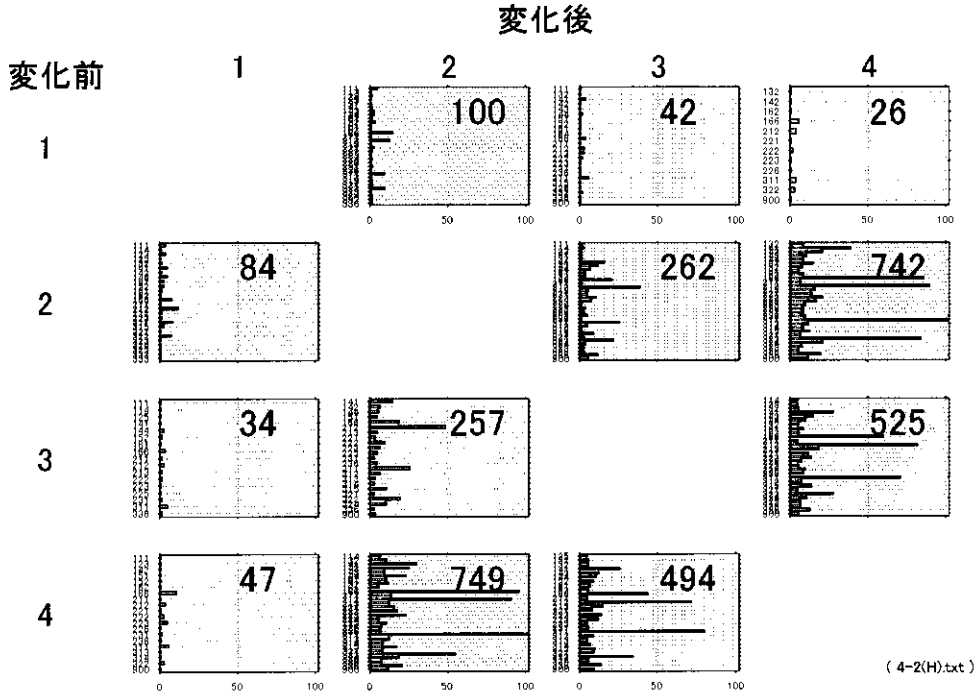

図 4 - 2(H)　聴覚：主要病因

5．知的機能

5．1．遊び

◆旧版

1	何もしないでいる
2	一人遊びをする
3	他児の遊びを見ている
4	大人を媒介として他児と遊ぶ
5	仲間遊びができる

◆改訂版

1	遊びらしいものは全くみられない
2	何かを楽しんでいる様子がある
3	ひとり遊びをする
4	他児の遊びをみている
5	大人（職員や家族）と遊ぶ
6	大人（職員や家族）を介して他児と遊ぶ
7	仲間遊びができる

■ 旧版・改訂版を統合 ■

	旧版	改訂版
A	1	1
B	2	2，3
C	3	4
D	4	5，6
E	5	7

＜図 5-1 (A)～(H)＞

全体： 対象症例数 9329 名の中で不変群 4527 名を除いた，4802 名（51.5%）に変化がみられた。改善は 4928 回，増悪は 4037 回発生し，改善は増悪に比べて多かった（改善/増悪：22.1%）。また，改善と増悪の和（8965 回）を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.87 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，A 群→B 群（1572 回，改善回数の 31.9%），B 群→D 群（1025 回，20.8%），C 群→D 群（737 回，15.0%）であった。一方，増悪に関しては，B 群→A 群（920 回，増悪回数の 22.8%），C 群→B 群（824 回，20.4%），D 群→B 群（731 回，18.1%）の変化が多くみられた。

性別：男性では何らかの変化が 4702 回みられ，改善が 2576 回（54.8%），増悪 2126 回（45.2%）であった。女性では何らかの変化が 4263 回みられ，改善が 2352 回（55.2%），増悪 1911 回（44.8%）であった。女性での改善が男性のそれより若干高い傾向を認めた。

年齢：年齢との関係では改善群，増悪群とも 20 歳代にその数が最も多く，25 歳前後をピークとするほぼ正規分布に近い分布を示した。

入所期間：入所期間との関係（移行がおこるまでの期間）をみると 5 年以内が最も高く，その後段階的に減少傾向をみせている。

大島の分類：大島の分類との関連を見ると改善群，増悪群とも大島の分類 1・2・5・10・17 に多く，その傾向はほぼ同様であった。

身長・体重と三者の関連の面でもほぼ似た分布を示していた。

	変化後 A	B	C	D	E
変化前 A	704 名	1572 回	171 回	73 回	8 回
B	920 回	2389 名	680 回	1025 回	67 回
C	172 回	824 回	227 名	737 回	74 回
D	57 回	731 回	457 回	640 名	521 回
E	11 回	87 回	86 回	692 回	567 名

対象症例数 = 9329 名
不変症例数 = 4527 名
変化症例数 = 4802 名

改善変化回数 = 4928 回
増悪変化回数 = 4037 回

(5-1(A).txt)

図 5 - 1(A)　遊び：全体

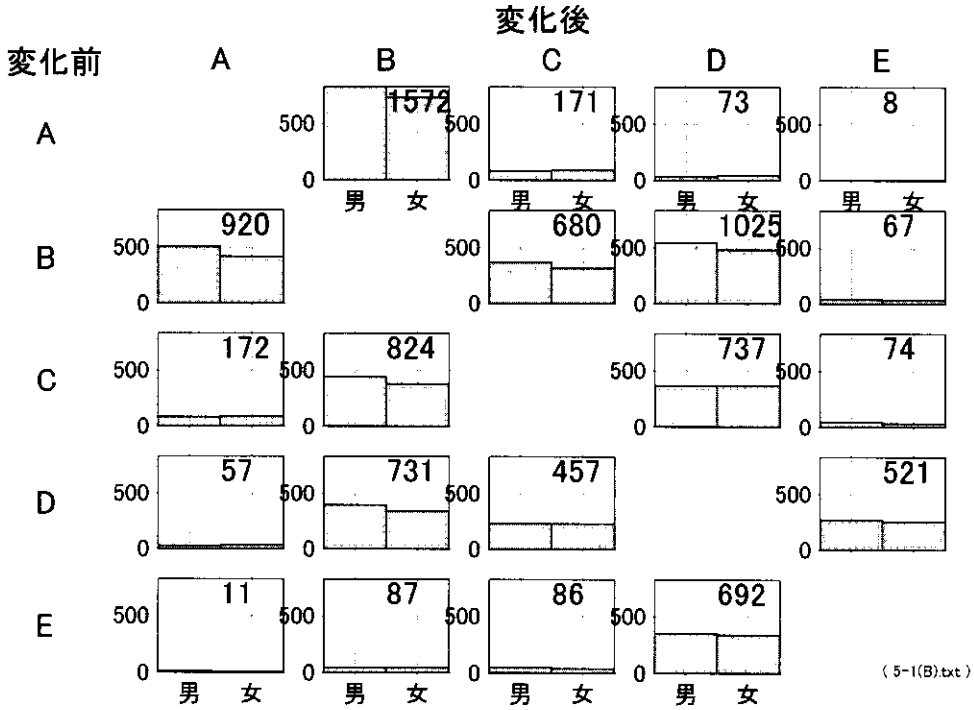

図 5 - 1(B)　遊び：性別

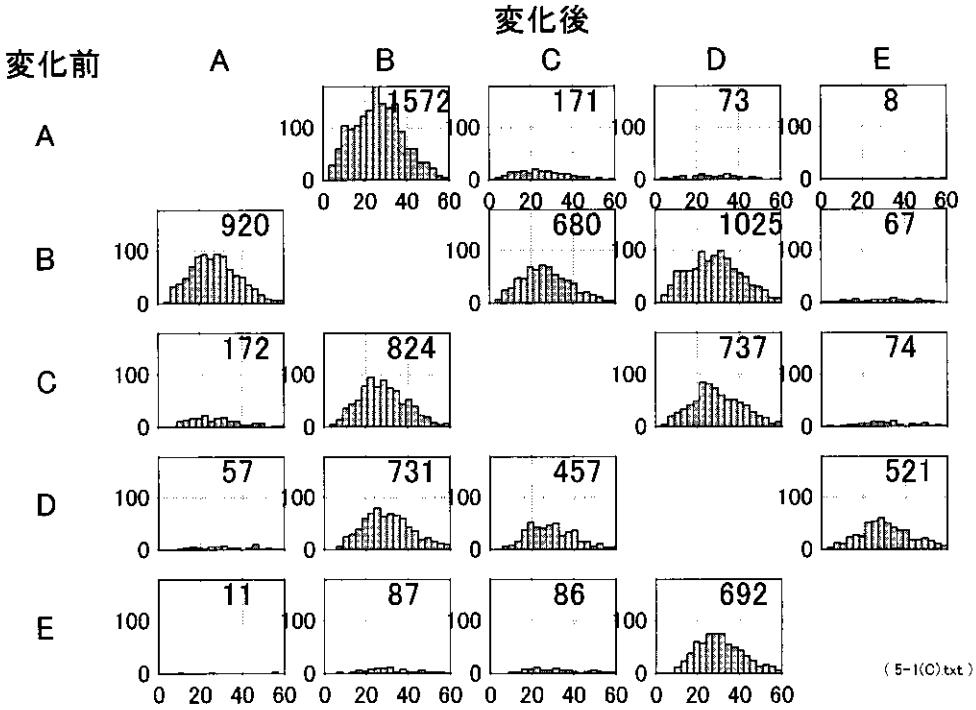

図５-１(C)　遊び：年齢（歳）

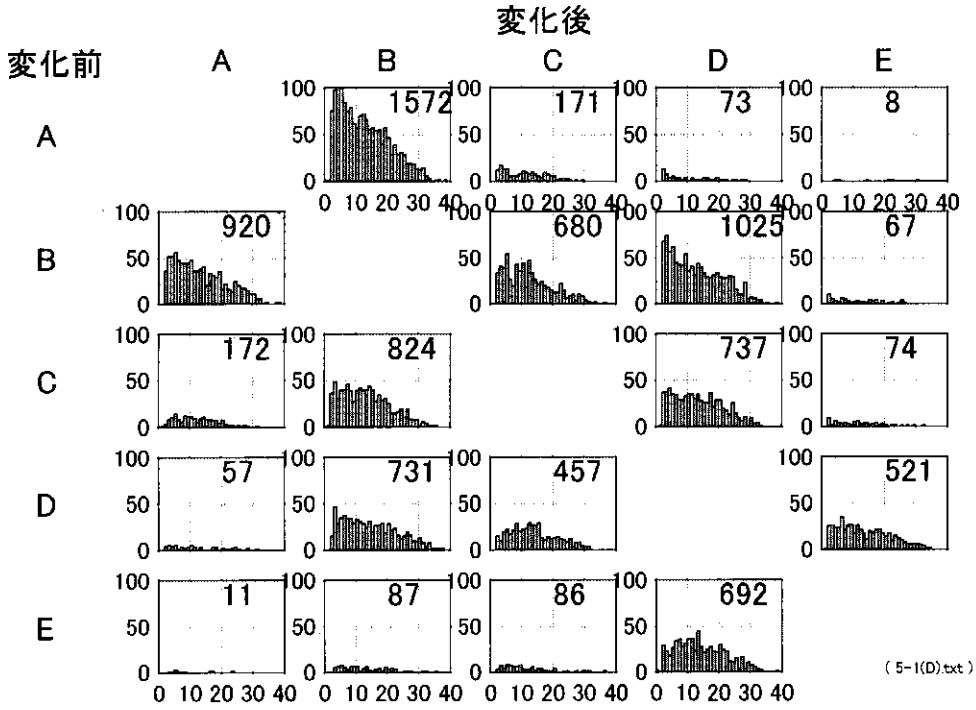

図５-１(D)　遊び：変化発生までの入所期間（年）

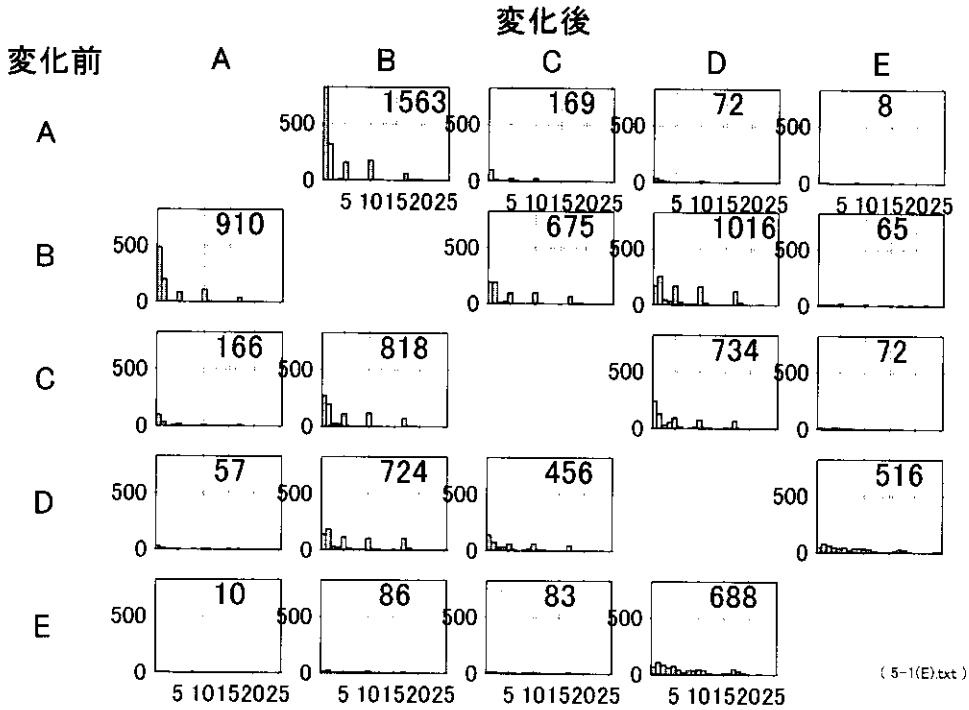

図５-1(E)　遊び：大島の分類

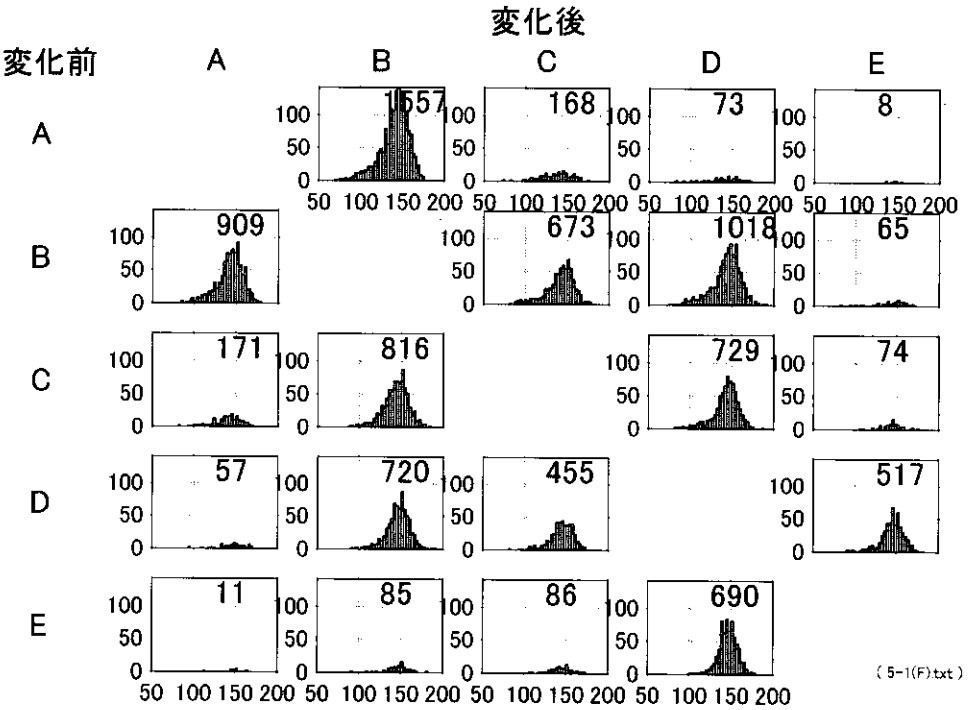

図５-1(F)　遊び：身長（cm）

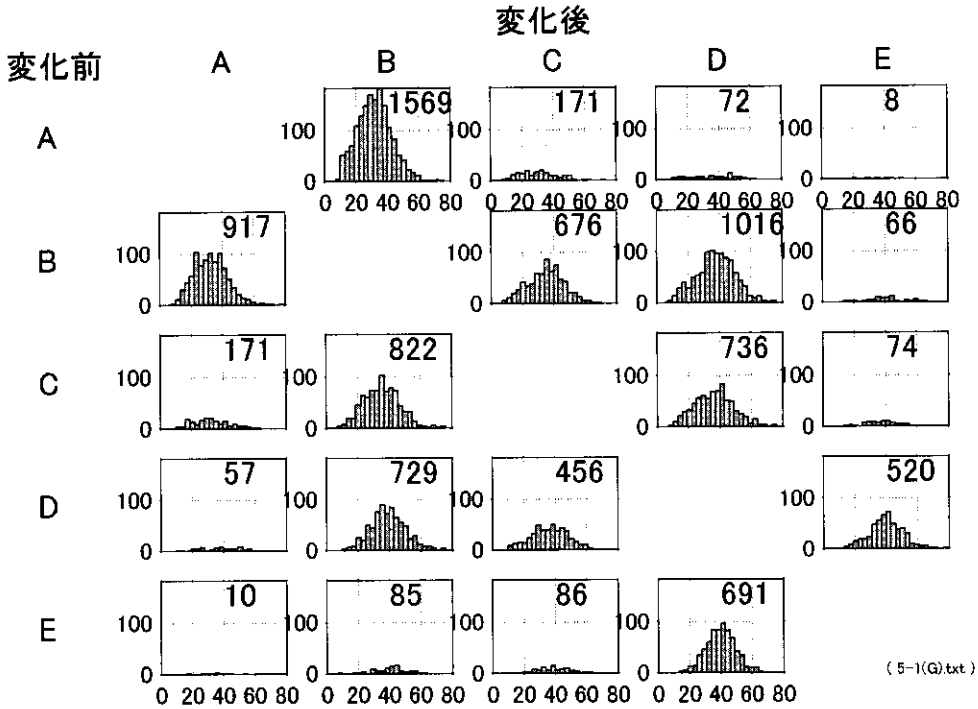

図 5 - 1(G)　遊び：体重（kg）

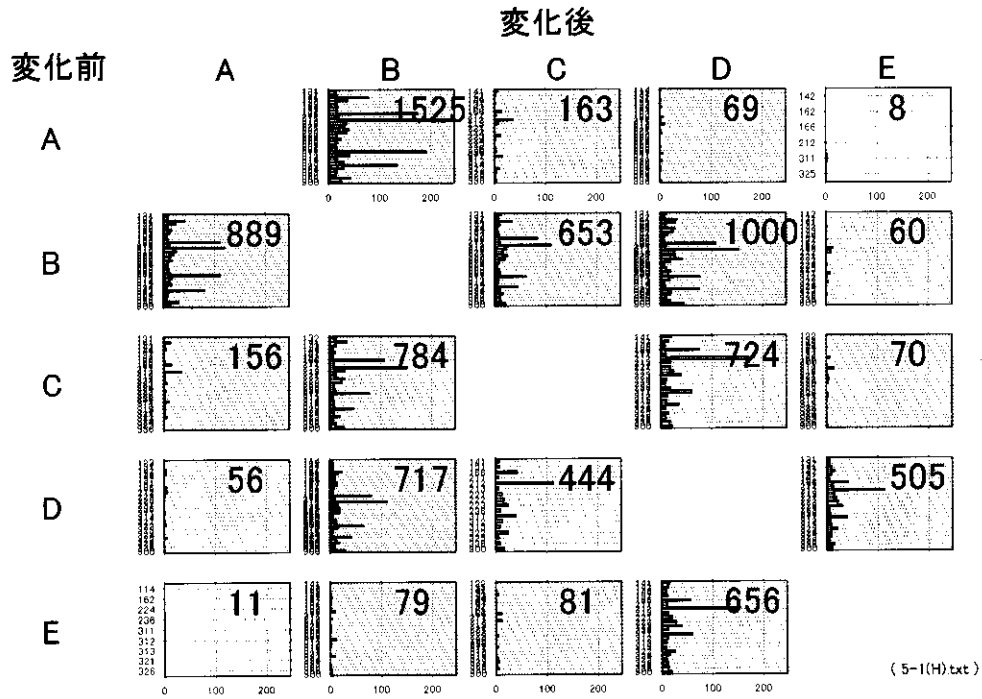

図 5 - 1(H)　遊び：主要病因

5．2．コミュニケーション（理解）

◆旧版

1	働きかけに全く，またはほとんど反応しない
2	身体的接触に反応する
3	話しかけに反応する
4	単語の意味を理解する
5	日常会話を理解する

◆改訂版

1	どんな方法で働きかけても全く分からない
2	何らかの方法で働きかけると多少は理解する
3	簡単な言葉や身ぶりなどを理解する
4	日常会話を理解する

■ 旧版・改訂版を統合 ■

	旧版	改訂版
A	1	1
B	2，3	2
C	4	3
D	5	4

＜図 5-2（A）～（H）＞

全体：対象症例数 9303 名の中で不変群 5009 名を除いた，4294 名（46.2%）に変化がみられた。改善は 4056 回，増悪は 3402 回発生し，改善は増悪に比べて多かった（改善/増悪：19.2%）。また，改善と増悪の和（7458 回）を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.74 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，A 群→B 群（1288 回，改善回数の 31.8%），B 群→D 群（1801 回，44.4%），C 群→D 群（820 回，20.1%）であった。一方，増悪に関しては，B 群→A 群（1441 回，増悪回数の 42.4%），C 群→B 群（1036 回，30.5%），D 群→B 群（776 回，22.8%）の変化が多くみられた。

性別：男性では何らかの変化が 3976 回みられ，改善が 2194 回（55.2%），増悪 1782 回（44.8%）であった。女性では何らかの変化が 3482 回みられ，改善が 1862 回（53.5%），増悪 1620 回（46.5%）であった。両者に差を認めなかった。

年齢：年齢との関連では 25 歳前後にピークをもつ，ほぼ正規分布を示していた。

入所期間：移行を受けるまでの入所期間との関連では，10 年以内にその数が多く，その後は年数が増えるにつれ，減少傾向を示していた。

大島の分類：改善群，増悪群そして不変群共に，大島の分類 1・2・5・10・17 にその数が多い点で共通していた。

身長，体重：身長や体重に改善群，増悪群との間には顕著な差を認めていない。

	変化後 A	B	C	D
変化前 A	440 名	1288 回	27 回	4 回
B	1441 回	2534 名	1801 回	116 回
C	30 回	1036 回	765 名	820 回
D	14 回	105 回	776 回	1270 名

対象症例数 = 9303 名
不変症例数 = 5009 名
変化症例数 = 4294 名

改善変化回数 = 4056 回
増悪変化回数 = 3402 回

(5-2(A).txt)

図 5 - 2(A)　コミュニケーション（理解）：全体

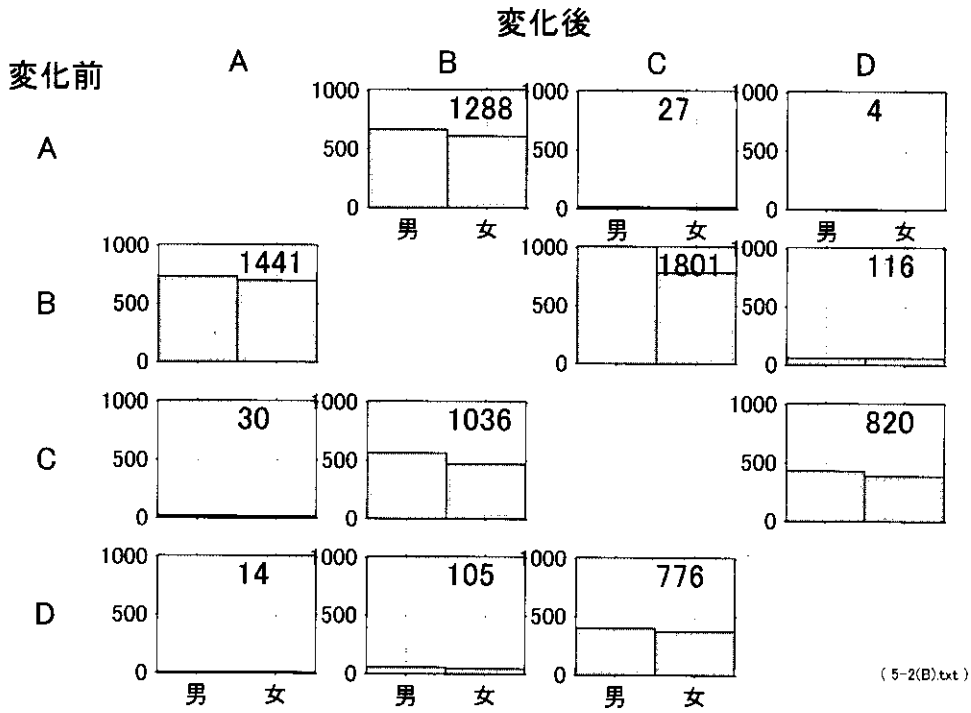

図 5 - 2(B)　コミュニケーション（理解）：性別

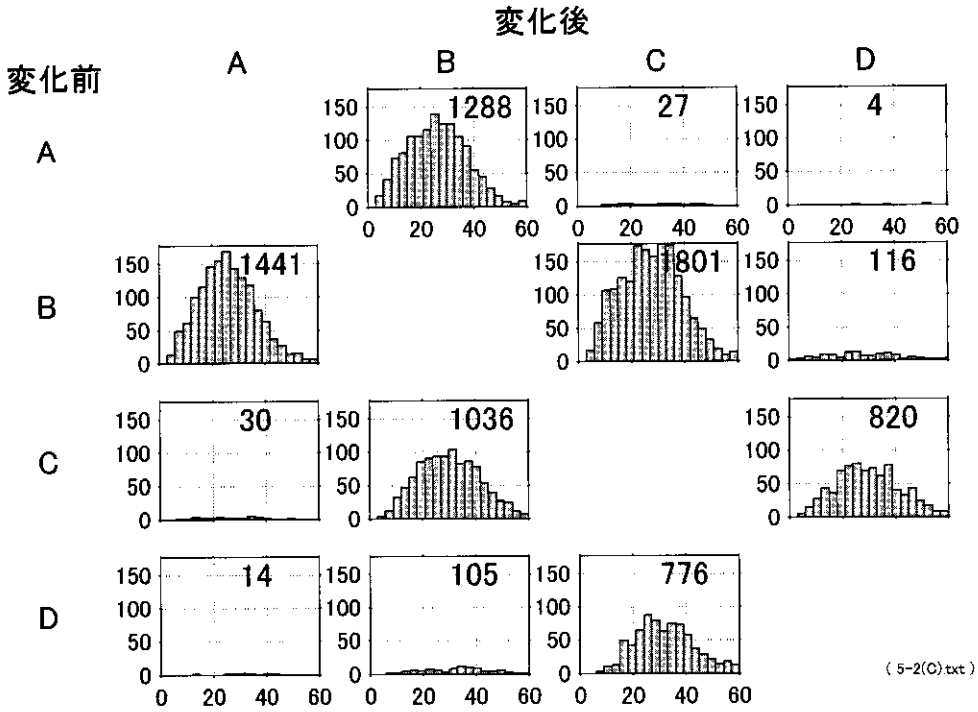

図5・2(C)　コミュニケーション（理解）：年齢（歳）

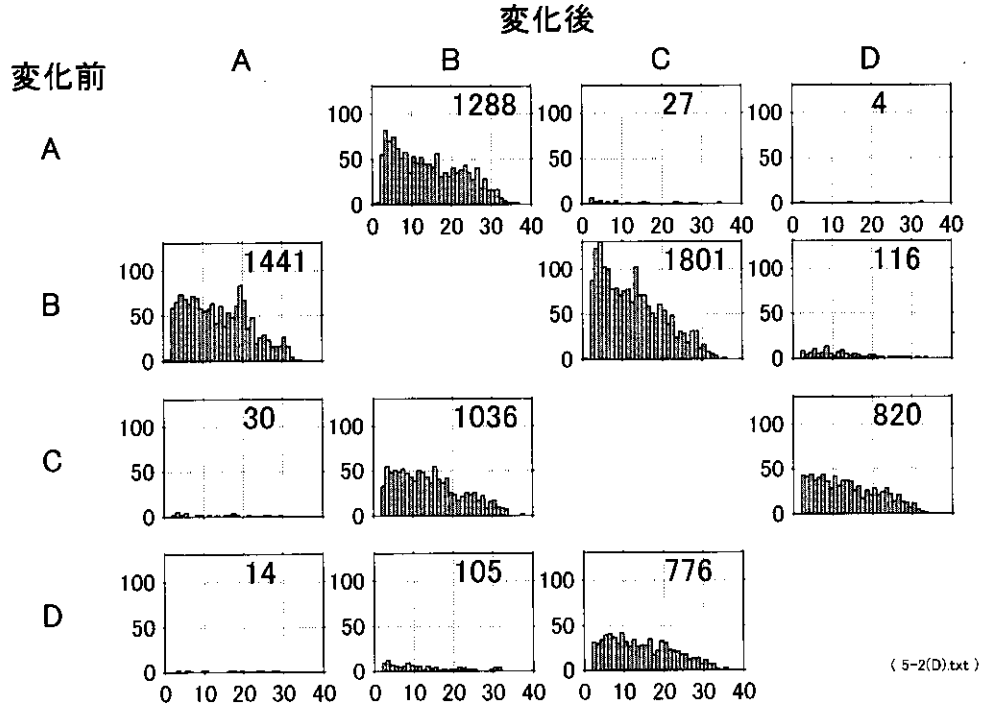

図5・2(D)　コミュニケーション（理解）：変化発生までの入所期間（年）

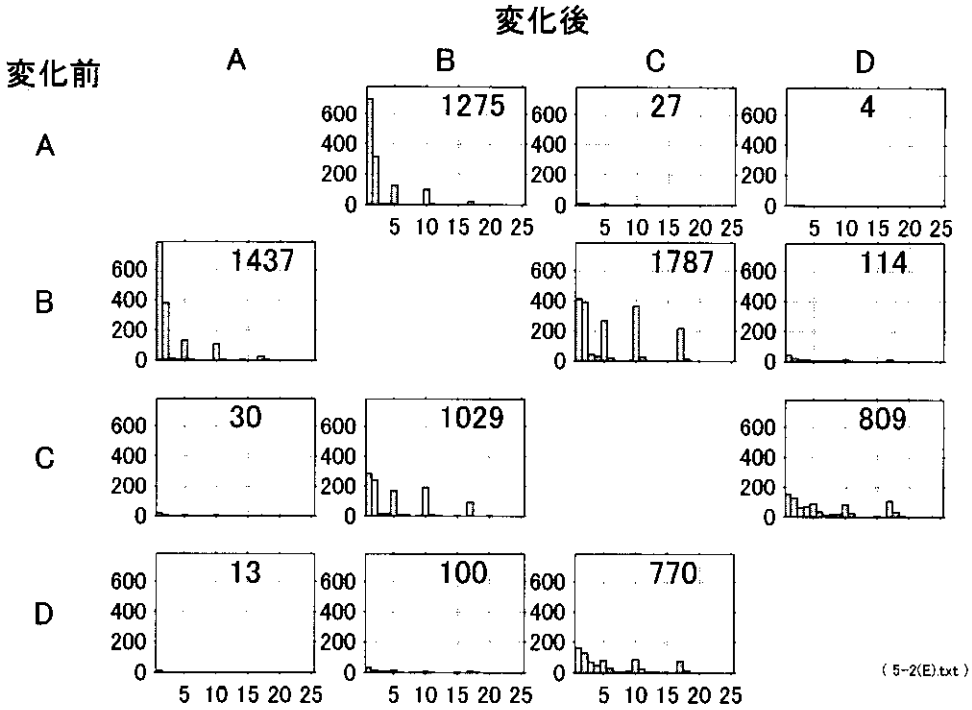

図5・2(E)　コミュニケーション（理解）：大島の分類

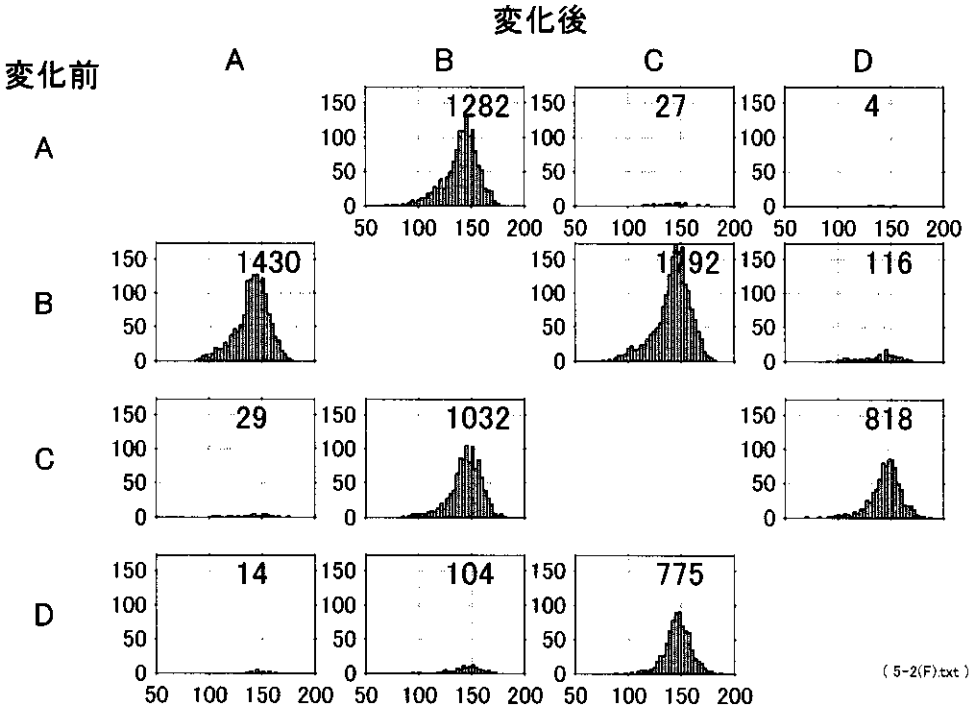

図5・2(F)　コミュニケーション（理解）：身長（cm）